
二人の夏が始まりました

アサオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の夏が始まりました

【Nコード】

N1827I

【作者名】

アサオ

【あらすじ】

夏休みも気がつけば、残すところ一週間になっていた。これは、ごくごく普通とは言い難い高校教師である俺が明らかに一般的な女子高生ではないアイツと一緒に過ごした短い夏休みのお話である。

とある夏の昼下がり、糞鬱陶しい蝉どもが合唱してるような時間帯のことである。

「……むにゃむにゃ」

新校舎三階にある一年三組の教室。そこで女生徒が一人、ぽつんと机に突っ伏して寝ていた。見知ったやつである。

出席番号33番の宇田川青子だった。

それを見つけた仮にも担任教師である俺は当然――。

パシンッ。

一発、頭をひっぱたき。

「寝てないで起きろ、宇田川」

声をかける。行動の順番は間違っていない。

「おふっ」

宇田川は妙な声を漏らして、むくりと顔をあげた。

「……なにすんだよ。くらじー」

「寝てるおまえが悪いんだ。それとくらじって呼ぶな。先生と呼べ。先生と」

「くらじを先生とよぶのは他の先生に失礼じゃん」

「おまえが失礼だ」

パシンッ。

「おふっ……暴力はんたーい」

「愛で叩いてるから痛くない」

「愛とか気持ち悪いこといつてんなよ。くら爺」

「俺はまだ25だ。爺とか言われる歳ではない」

まだまだ余裕で現役だ。2、3日完徹したあとにフルマラソンを完走することだって可能だ。

「そんなことより、宇田川。プリントは終わったのか？」

「ほれ」

ぐいっと目の前に突き出されたプリント。俺がさっき補習のまとめとして宇田川に渡したモノで、戻ってくるまで終わらせておくように言ったものである。

パシンッ。

「おふっ」

「なにやってんだ。真っ白じゃねーか」

真っ白だった。それはもう青空の下で風に揺れる洗い立ての白いシャツのように。

本当に洗剤だけでこの白さなの！？当たり前だバカヤロウ。

「おまけに波打ってるぞ」

「私のよだれだけど、舐める？」

「んじゃ、ちよつと味見」

ベロンと舐めてみた。紙の味しかなかった。

「うわ……今のは流石にヒクわ……変態かよ」

「なんだおまえ知らなかったのか？俺は変態だぞ」

「自信もって言うなよ。そんなんでよく教師やってられるな」

「まあ、学校で俺の本性知ってるやつなんておまえしかいないから別に何の問題もない。どいつもこいつも適当に調子合わせて、笑っとけばコロッと騙されてくれるもんだ」

「反面教師」

「変態もバレなきゃ一般人」

「私にバレてるぞ」

「おまえには別にいいんだよ」

「惚れたか？」

「乳臭いガキには興味ないな」

「なら、なんで私にはバレててもいいんだよ」

「俺だっていつも皮被つてると疲れるんだよ。溜まったモノを吐き出せる奴がいると都合がいい」

「なんだよそれ。疲れる生き方だな。自分に素直にやりたいことやって生きりゃいいだろ」

「はっ、まだまだガキだな」

「おまえみたいな大人にはなりたくねーな」

「今はそうかもな。おまえも年取ればいずれわかるさ」

「そうかよ」

つーんと拗ねた。

「かわいいなおまえ」

「急になんだよ。やっぱり惚れたか？」

「宇田川、確かおまえ16になってたよな？」

「それが？」

「俺と結婚しろ」

「くたばれロリコン」

「嘘だ。ちよつとドキツとしたか？」

「するか」

「おまえ、俺が週に何回ガキ共にコクられてるか知ってるか？手の指だけじゃ数え切れないぜ」

「イケメンで誰にでも優しい先生とか、あー、惚れそ」

「人の本性も知らないでキャツキャツウフフと馬鹿な奴らばつかだよ。こっちはガキなんかじゃ興味ねーのに」

「くらはじはガキだけじゃなくて人間そのものに興味ないんじゃないのか？」

「お、わかるか」

「なんとなく」

人間そのものに興味がない。

宇田川の言つとおり、俺はいつのころから人間に興味をもてなくなっていた。

人間はどうしようもなくつまらない生き物だ。

宇田川青子は馬鹿である。具体的に言つと成績が悪い。

そのため、宇田川は夏休みであるにもかかわらず学校に登校しなければならぬ苦行をあたえられていた。つまりは補習授業。宇田川にとつて夏休みなどあつてないようなものだ。

そして、その補習に付き合つて永田倉次、つまり、俺にとつても夏休みなんてあつてないようなものになっていた。

が、そんな日々も今日で一先ずの終わりをむかえる。宇田川の補習は今日で最後だ。

これでやつと宇田川も俺も夏休みをむかえられるわけだ。この際、夏休みが今日も含めて、あと一週間しかないことは眼をつぶると思う。

「宇田川ー。終わったかー？」

教室の端っこに置いてあつたパイプ椅子を引っ張り出した俺はそれに腰掛け、茹だるような暑さに団扇一つで対抗していた。パタパタと。

俺はすでに仕事を終えているので、あとは宇田川次第だった。

「……」

「おーい、宇田川ー」

「……」

「……？」

「……むにゃむにゃ」

パシンッ。

「寝てんじゃねーよ」

「おふっ」

「早くヤレよな。おまえが終わらないと帰れないだろ」

「……だってわかんねーもん」

「おまえ、今まで補習でなにやってきたんだよ」

「補習とか知らん。私ほとんど寝てたし」

パシンッ。

「おふっ」

「……教科書見ていいから、さっさと空欄埋めろ」

「教科書見るより、くらじが教えてくれたほうが早いと思います」

「面倒臭い」

「ヘタレ」

「意味わからん。ヘタレ言うな」

宇田川はぶつくさ文句を言いながら、机の中から教科書を取り出すと、パラパラとページをめくっていく。

もくもくと作業に取り組む。

俺はそれを視界の片隅にパタパタと団扇をあおいだ。

しかし、今日は暑いな。

早く夏終わってくれないかなあ。

「おい、宇田川ー」

「まだ終わってない」

「今日、暑いなー」

「みなまで言うなよ」

「おまえアイス買ってこいよ。俺、ガリガリ君な」

「くたばれ」

「なんだよ。60円ぐらい奢ってくれてもいいだろ」

「しかも、私が奢るのかよ」

「当たり前だろ。当然だろ。普通だろ」

「異常だろ」

「だったらなにか？俺がおまえにアイス奢るのか？ふざけんじゃねーよ、バーカ」

「60円ぐらい自分で出せ。社会人がケチケチすんな」

「ちっ、そう言われると言い返せないぜ。しゃーない。自分で買いに行くか」

「私はあれだ。メロン型の容器に入ったメロンアイスが食べたい」

「あいよ。任された」

「お、素直だな」

「買いに行ってくるから、おまえはプリント終わらせとけよ」

まっ、任されたふりなんだがな。買ってきたアイスを宇田川の目の前で食べてやろうとたくらんでる。誰も買ってきたやつをやるとは

言っていない。

教室を出て、廊下に出て、校門から学校の外。夏の日差しに曝される。暑さでばやける町並みを前に早くも屋外に出たことを後悔した。

糞暑い。

夏は好きに馴れそうにないと思った。

「くたばれ変態教師」

「アイスうめえ！ガリガリ君うめえ！」

最寄りのコンビニから戻った俺は先程企てた計画を実行していた。

宇田川によく見えるようにと、わざわざパイプ椅子を宇田川の席の前に設置して、シャクシャクシャクシャクとガリガリ君をほうばっていた。

「私のメロンアイスはどうしたんだよ」

「宇田川、俺が素直に買ってくると思ってたのか？」

「……」

あ、ちょっと拗ねた。

「それちよつとくれ」

「いや、もう食べ終わっただし」

すでにガリガリ君はただの木の棒に成り果てていた。残念なことに当たりはでなかった。棒の側面にはなんの文字も刻まれていない。

「それともなにか？この棒が欲しいのか？」

「そんなのいらん」

「ま、遠慮すんなよ」

「うぐ……！？」

言うが早いか俺は持っていた棒を宇田川の口の中に突っ込んだ。

「……！？」

「俺との間接キスに嬉しくて声も出ないか？」

「——っ！！」

なんて冗談めかしに言うと、途端に宇田川が顔が赤くなっていく。いつも仏頂面な宇田川にしては珍しい反応だった。

「お？照れてんのか？」

「……」

宇田川はぺつと棒を吐き出すと怨みがましく俺を睨みつける。

「やっぱり、照れてんだな？照れてんだろ？」

「……のに」

「あ？」

ぼそりとなにかを呟く宇田川。あまりに小さい声だから聞き取れなかった。

「……初めてだったのに」

初めて？なんだ間接キスのことか？

「間接ぐらいなんだ。初めてもなにも間接だろ？ノーカウント、ノーカウント」

「……お返しだ」

不意に宇田川の手が伸びた。がしりと俺の顔が両脇から固定されて、そのままぐいつと俺と宇田川の顔が近づいて――。

「むちゅー」

「んー！？」

キスしやがった。間接なんて生温い。口と口だ。

一瞬、頭の中が真っ白になったが、すぐに状況を理解した俺は高速で宇田川から距離をとった。そりゃもう物凄い勢いで。

「う、宇田川、てめえ……！急になにしゃがるッ！」

「やったら倍にして返す」

「だ、だからって、おまえ！今は……ッ！」

「なんだよ。照れんなよな。なんだ？まさか、くらしも初めてだったとか言わないよな？」

「……んな！？ふざけんなバカヤロウ！誰が初めてだ！」

「図星だな。くらしは25にもなってチューもしたことなかったんだな。うわっ、はずかしー」

「はぁ！意味わかんねーし！？」

「顔真っ赤になってんぞ」

「はぁ！意味わかんねーし！？別に赤くなってねーし！？」

「あんなにモテるのチューもしたことなかったのかよ。まさか、彼女もいたことないとか？」

「別に彼女とかいらねーし」

「ヘタレかよ」

「なんでそうなる。ヘタレ言っな」

「ヘタレ、ヘタレー」

「だー!!うるせー!!おまえはとっととプリント終わらせろっつーの!!」

永田倉次、つまり、俺の彼女いない歴はイコールで年齢に結び付く。俺は生まれてから恋人がいたことがない。

モテないわけではなかった。顔はそこいらの芸能人なんかより断然いいし、性格にしたって上手く本性を隠している。

いいよる女なんて、星の数ほどいた。

故に、俺は彼女が出来ないのではなく、つくらないのだ。

理由はいろいろとある。別に好きでもないやつと付き合いたくないとか、付き合ったら付き合ったでなんか面倒臭さそうだなとか。簡単なもんだ。

別に過去にトラウマがあったりとかそういうわけではなかった。

『なんとなく』という理由が一番しっくりくる。

「くらくらー」

「……あ？なんだ？終わったのか？」

「いや、全然」

「おまえ、いい加減にしろ」

「くらじ。私ってさ寮生活だろ」

俺の言葉を見殺して宇田川は無理矢理話を展開してきた。

「うちの学校に通ってるやつは大体そうだろ」

「それでな。今、寮に帰っても誰もいないんだ」

「やったじゃん。貸し切りだな」

「ほとんどが夏休みを利用して里帰りしてるし、居残り組は居残り組で親睦を深めるためにとかいって、みんなで沖縄旅行だって」

「で、おまえは一人だけ取り残されたわけか」

「補習あったし」

「おまえの両親海外だしな」

「面倒臭いし」

「おまえ友達いないもんな」

「みんな夏休み終わりまで帰って来ないって」

「なるほど、おまえは残りの夏休みを寮で一人淋しく過ごすんだな。うわ、花の女子高生が悲しいわぁ」

「うるさい。25歳で初ちゅーもすませてなかった悲しい奴には言われたくない」

「おまえだって人のこと言えないだろ」

「私の初ちゅーは16歳の夏、担任教師に奪われましたとさ。私の勝ち」

「早い遅いに勝ち負けの概念はない。だいたい奪われたのは俺の方だから。人聞きの悪いこと言うな」

「そんなん知らん」

「はぁ。わかったよ。もう俺の負けでいいや」

「認めたな。よし、新学期始まったらくらじに襲われたって言い触らす」

「ふーん。で、おまえはまず誰に言い触らすんだ？友達か？あ、おまえ友達いなかったっけ？ごめん、ごめん」

「話す相手ぐらい、いる」

「嘘っけ」

「しまったバレた」

「おまえの話を聞くような物好きなんて俺しかいない」

「思い上がるな。自惚れるな。捜せば他にもきつといる」

「いや、いないと思う」

「うん、私もそう思う」

「自覚あるのかよ」

「乙女だから」

「はい、そうですか」

「信じてないな。くらじ、私だってな、ちゃんと乙女の恥じらいつていうものをもってるんだぞ」

「おまえに恥じらいつて言葉ほど似合わないモノはないと思うけどな」

「私は恥じらつて、さっきチューした時に舌を入れなかった」

「うわ、すごい恥じらってますね奥さん」

「認めたか。私の勝ち」

なんだかんだいいつつも俺は宇田川との会話を楽しんでいた。

宇田川との会話は他の奴らとの会話に比べ面倒臭くないし、楽だ。

多分、俺と宇田川は似た者同士なんだと思う。

「残りの夏休みを家で一人、淋しく過ごす、くらじ先生」

「急になんだ。今度こそ終わったんだろうな？」

「終わるわけあるか、バーカ」

「バカっていったほうが、バカなんだよ、バーカ」

「なら、くらじもバカなんだな」

「俺はバカじゃない。変態だけど、バカではない」

「なら変態」

「わーい！」

「バカより変態のほうがいいのかよ」

「いいんだよ。俺は変態に誇りをもっている」

「くらじの誇りなんて埃みたいなものだろ」

「宇田川、別にうまいこと言えてないからな」

「そんなことあるかも」

「でだ。宇田川、残念だけど俺は残りの夏休みを家で一人、じめじめつと過ごすつもりはないから」

「ナンパ？」

「そんなことしないし、そういうことでもない。それに俺はナンパされるほうだ」

「言ってる。で、どういう意味だよ」

「俺は残りの夏休み、友達のいない宇田川の部屋で寝泊まりする予定」

「汚される。犯される。近寄んじゃねー。変態教師」

「嘘だ。本当は里帰りする」

「裏切り者」

「裏切りという行為は、それらが仲間同士であることが前提だ。故に俺達は仲間でもなんでもないため、裏切り者というのは当て嵌まりません」

「お互いに初めてを捧げあった仲じゃん。超愛してるぜ」

「実は俺、多額の借金を抱えてる」

「あー、ポケット叩いたら中から離婚届けできたー。ほら、さつさとサインしゃがれ」

「金の切れ目が、縁の切れ目。せちがらい世の中だぜ。そのまえに俺達、結婚してないからな」

「くらじ、さつき私にプロポーズしたじゃん」

「あらやだ、この娘。現実を自分の都合のいいように湾曲していらつしゃるわ」

「つか、里帰りつて言っても、どうせ隣町とかなんだろう？往復するのに1時間もかかんない近場なんだろう？」

「いや、俺の故郷、東北のと田舎」

「夢見んな。幻想だ」

「俺の故郷ではな夏の終わりに祭があるんだ。この時期には必ず帰省して、祭の準備云々を手伝いをするようになってんだよ」

「祭があるのか」

「夏の風物詩だ」

「私も行きたい。連れてけ」

「はあ？」

俺は宇田川の唐突な発言に思わず、そう返していた。

「補習ないなら暇だから。だから私を連れていけ。祭の手伝いって
いうのも気が向いたらやってやるし」

「嫌」

「……」

「……」

「むちゅー」

「んー！？」

なにを思ったのか、宇田川はまたキスしてきやがった。俺はそれを
速攻で引っぺがす。

「な、なにしやがる！」

「連れてけ」

「だから嫌」

「今度は舌いれるぞ」

「そう何度もキスされない」

「連れてけ」

「嫌」

「連れてけ」

「……」

「連れてけ」

「……はあ。わかったよ。連れて行ってやるから、黙れ」

「嘘だバーカ。誰がくらじと一緒になんか行くか」

俺はその一言でカチンときたのはいうまでもないことである。

「宇田川」

「うけるー」

「変態に二言はない」

「ああ？」

「言ったからには俺はおまえを絶対に連れていくからな」

「ふざけんな。私は残りの夏休みを部屋でじめって過ごすんだ」

「そんなこと知るか。おまえは俺と一緒に来い。もう強制だ」

「だから嫌」

「俺と一緒に来い」

「やだ」

「つーか、今すぐに行くぞ。今から出れば夜には着く」

「補習終わってないし」

「そんなんどうだっていいわ」

「教師の言うことじゃねー」

「ちなみにあれな、始業式前日まで帰って来ないから、泊まる用意も必要な」

「だから行かないって」

「とりあえず、おまえの寮に寄って、それから俺ん家。用意出来たらそのままゴーだ」

「おい、くらじ」

「さ、行くぞ」

なにか言おうとしている宇田川の腕を引っ張り無理矢理に立たせる。話しなんて聞いてやらない。

「お、おい！離せ！」

「ぐだぐだ煩い。黙って俺について来い」

「だから嫌だつて！」

なおも嫌がる宇田川、俺は面倒臭かったので。

「……ん」

「ううー!？」

無理矢理唇を奪って黙らせた。今更、キスの一回や、二回、なんてこたない。それに、やられっぱなしは嫌だった。

べつにしたかったわけじゃない。

「来い」

「……わ、わかったよ」

「よし。なら行くぞ」

俺は宇田川の手を引いて教室を出た。

「ほら、やるよ」

校舎を出る前に職員室に寄る。俺はその職位室に備え付けられている冷蔵庫の中から取り出したモノを宇田川に渡した。

「アイス……？」

「おまえの言つてたのそれだろ？」

メロン型の容器に入ったメロンアイス。

「一応、ご褒美だ。有り難く感謝しろ」

「ツンデレかよ」

「つんくがデレデレ？なんだその気持ち悪い状況」

「失礼だ。つんく様に誤れ」

「めんご、めんご。はい、謝った」

「よし、私に免じて許す」

「おまえ何様だ」

「神様だ」

「そりゃ偉いな。あー、偉い、偉い。よし、頭撫でてやる。なでなで」

「やめろ、触んな。ハゲが移る」

「移してるんだよ。って、まて、俺はまだハゲてないから」

「ふむ、まだ自分では気がついてないか。それに、まだってことは
どういうことかな、くらじ君」

「んなわけあるか。そろそろ行くぞ」

「ふっ」

「……」

宇田川は不敵に笑っていた。

言っておく。俺はハゲてない。

宇田川と共に職員駐車場にとめてあるマイカーのもとへ。道すがら、
宇田川は美味しそうにメロンアイスを食べていた。

「うお。大気圏突入可能なシールドも溶けそうだ」

「こんなところ入ったら茹でる」

車内は超暑かった。とりあえず窓全開。冷房はつけない。ガソリン
をくうし、それに冷房は嫌いだった。

エンジンがかかる。アクセルを踏むと車が動いた。窓から僅かに風
が入ってくる。熱風だったけど。

まずは学校から徒歩5分の近場にある学生寮へ。

「勝負下着は忘れんなよ。ちなみに俺は黒が好き」

「そんなもんあるか。気持ち悪いぞ変態教師」

しばらく待つと荷物を抱えて宇田川が戻ってくる。

「合言葉は？」

「変態教師」

「愛下着は？」

「黒のレース」

「よし合格だ。乗れ」

宇田川を乗せて際発進。今度は愛しの我が家へ。1DKとちっちゃいアパートだけど、家賃安いし、コンビニ近いし、結構いいところ。

「車にいるか？」

「動くのめんどろ」

「わかった。すぐ戻ってくる」

「避妊具忘れんなよ」

「そのジョークはちょっとブラック過ぎる」

「私も言っただけがついた。忘れる」

「忘れる」

すでに用意はしてあったので、荷物を持ってすぐに車へと戻る。

「合言葉は？」

「初めてはソーダ味」

「ガリガリ君な。乗ってよし」

「つか、これ俺の車だから」

三度車に乗り込み再々発進。

「なあ、くらじ」

車を走らせてしばらく、不意に宇田川が口を開いた。

「あー、どうした？」

聞き返す。

「飛行機乗る？」

「乗る」

「私、パスポート持ってないんだけど？」

「国内だ。バカ」

「え？いらねーの？」

「いらねーよ」

「飛行機乗れんの？」

「乗れるよ」

「全財産3000円しかないぞ？」

「だしてやるから心配すんな」

「今から行つてのれんのか？予約とかしなくて大丈夫なのか？」

「さあ？行けばなんとかなんだろ」

「……」

「宇田川」

「なんだよ」

「なんだかんだ言つて、結構、不安なんだろ」

「……んなわけあるか、くたばれ」

「まあ、なにがあっても俺がついててやるから安心しろ」

「気持ち悪い。変態」

ぶつくさ言つてはいるが、宇田川の言葉に棘はなかった。

[illegible]

「うるせえ！バカ！笑うな！くたばれ！変態！変態！変態！変態！」

腹を抱えて大笑いする俺。

顔を真っ赤にして俺をパコパコと殴る宇田川。全然痛くない。ここは愛を込めてうたちゃんとも呼んでやろう。

「いや……！だって……！おま……！く、ははは……だははははは
はははははは！」

「わ、笑うんじゃねー！」

しばらく、まともに話すことが出来そうにないので、簡潔に回想で説明しよう。

飛行機に乗った俺とうたちゃん。

そこで問題が発生したわけである。

うたちゃんも飛行機に乗るのが初めてだったのである。実は途中から薄々気がついていたのは言うまでもなかった。

そんな、うたちゃん。飛行機が離陸するまでの間、ビビりまくりで、

離陸するや離陸するであろつことが氣絶した。

そして、さらに――。

「だって……！おまえ……！その歳でおも――」

「それいじょう言つな――――――――――ッ……！！」

仕方ない。うたちゃんの名誉のために、これ以上はやめておこつ。

ま、今後このネタで弄りまくってやるけどな。

高校一年生にもなつてーとか、誰が後始末しつてやつたんだーとか。

ニヤリニヤリ。

空港を出て電車に乗り換え、目的地の駅に着いた時にはすでに日は沈んでいた。

「元気になった」

「やったな。うたちゃん」

「うたちゃんってなんだ変態」

しばらくだんまりだったうちちゃんが、ようやく元気を取り戻したようだ。

「ここがそうなのか？」

「そう、ここが。俺の故郷の仁崖町」

——上營市、仁崖町……。

それが俺の生まれ育った町の名前だった。

「田舎つつたわりには結構普通だな」

「まあ、田舎って言っても駅前だし」

無人の駅で、改札から一步外に出れば見渡す限りの畑が！なんて、ど田舎ではない。

そこそこ普通のところである。

最近はおちおちと近代化が進み、一目見渡してみても、ちらほらとあつちで見たことがある店が立ちならんでいる。心なしか視界が狭く感じた。昔に比べ随分と便利になったと思う。

それでもやっぱり田舎は田舎、町行く人はどこか無理をしているように俺には見えた。

まあ、俺には関係ないことだ。みんな好きに頑張ればいいと思う。

「折角だから夕飯でも食べてくか？」

夕飯をまだ食べていないことを思い出して、俺はうたちゃんにそう提案した。

「焼肉食べたい」

その一言で今日の夕食が決まった。

「くらじ、タダ飯って旨いな」

「バカ言うな。さっきの分は全部借金だ」

たかられた。結果、奢ったような感じになってしまっている。

いくら全財産が3000円しかない苦学生だからといって、焼肉を奢ってやるいわれはない。そんなに俺は人間出来てない。ちよっと痛い出費だったし。

そんなわけで、後々、取り立てる気満々だった。

「身体で払う」

「それはなんだ？おまえの身体が焼肉様より高価な品物だと？失礼なやつだ。焼肉様に謝れ」

「私、実は凄いテクニシャン」

「黙れ処女」

「自主トレだつて朝昼晩と一日三回欠かさない。ちなみにさつきもトイレに行つてイッてきた」

「あー、やたらとトイレが長いと思ったら……顔赤くして、息が荒かったのはそのせいか。つか、そのトレーニングだと気持ち良くなるのおまえだけだろ」

「女の子だつてエッチな気分になるんだから」

「おまえが言つと凄くがっかりな台詞だな、それ」

「しゃーないだろ。焼肉食べてたらたぎつてきたんだから」

「わからなくもないが。ここはわからないと言つておく」

「それと私は実は処女じゃないからな」

「すまん。辛いこと思い出させたな」

GO！そして、完！

まさか、うたちゃんにそんな辛く、悲しい過去があったとは！あつたとは！

「私の初めての相手はマイケル」

「外人だと！？ガチムチの黒人だと！？」

「いや、ただのバИБの名前」

「自分でやったのかよッ!!」

「あれな、死ぬほど痛い」

「男は死んでもわからない痛みだ」

うたちゃんはことごとく男の子が描く女の子の幻想を打ち砕いてくれた。いや、俺は幻想なんか抱いてなかったけどさ。それでも、これはちょっとヘビーだ。

「気が変わった。やっぱり、焼肉は俺の奢りってことでいいわ」

「くらじ、超愛してる」

「あーそうかい。俺もちよーあいしてるよ」

「でも、なんで急に?」

「いや、なんかおまえ不憫なやつだなーと思って」

心なしか。

うたちゃんの俺への態度に遠慮がなくなっ
て来ている気がする。いや、もともと図々しいやつではあったんだけど。

更にとにかく、もっと深いところまで俺に曝してくれているような、そんな気がした。何と無く。

そんな俺も、うたちゃんにたいして気がつくと言わなくていいことまで言っていたりする。

悪い意味ではなく良い意味で。なんというか、言葉にして言うのはちょっと難しい。

田舎の畦道を走るタクシーの中、不意に肩に柔らかい感触が。

見ると隣に座るうたちゃんが俺に寄り掛かってきたことがわかった。

離れると悪態をつこうと思ったが、聞こえる安らかな寝息にそれを感じ止まった。

「……すう」

まあ、お子様はもう寝る時間だからな。幸せそうな顔で寝てやがる。

窓の外に目をやると、そこには闇が広がるばかりで、目を懲らしても、ほとんどなにも見えなかった。

駅から車で、ものの数十分走らせれば、畑が一面に広がるばかりで建物もあまり見掛けなくなる。街灯ですらも見つけるのに苦労するほどだ。

俺の実家はそんな町外れで、畑と山との境目あたりにひっそりと突

っ立っている神社がそれだ。

神卸神社といって、地域限定で少しだけ知名度があつたりなかったり。実を言うと俺はその神社の後継ぎだったり、なんだったり。ま、今、話すことでもない。

もう少しで、愛しのわが家につく。

ふと、そこで気づく。

「……すう」

俺に寄り添い寝息をたてているうたちゃん。

——なんて説明しようか……。

連れて来たはいいが、そのことをまったく考えていなかった。

でも、まあ、大丈夫だろう。

オヤジ
変態と変わり者（母さん）のことだ。なんやかんやでわー！な感じでとくに問題にはならないだろうさ。

「……くらじい」

不意に呟いたうたちゃん。

「あ？」

「……じゃむ……むじゃむじゃ」

「寝言かよ」

寝言で俺の名前を呼ぶって……どんな夢を見てるんだよ、こいつは。幸せそうな顔しやがって。

ぐにぐにとほつぺを突いてやる。柔らかくて気持ち良かった。悔しかったのでむにととひっばってやった。

「……ううう」

呻くだけでうたちゃんは目をさまさない。俺はさらに調子にぐいぐいと引っ張る。

「……うー……うー」

強くやってもうたちゃんは起きなかった。

「くくく」

面白いヤツ。

そういえば、今更だが、俺の名前は永田倉次なわけだが。

読み方は『くらじ』ではなく『そうじ』な。

うたちゃんはくらじ、くらじ言ってるが俺の名前はそんな名前ではないわけだ。

「……ふう」

今日は疲れた。

家につくまで、もう少しかかるし、俺も一眠りしておくことにしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1827i/>

二人の夏が始まりました

2010年12月16日02時06分発行